

来年は、こう攻めろ!!



KeePer技研(株) 東日本事業本部 仙台営業所 鈴木 克浩

全国から1,200名の選手が参加したキーパー技術コンテスト。すでに来年へ向けて技術を磨いている選手もいるだろう。予選からチャンピオン決定戦まで審査員を務めたKeePer技研(株)東日本事業本部仙台営業所の鈴木克浩が今年を振り返るとともに、来年の戦い方を語る。

Q. 今回の審査のポイントは?



昨年の評価項目には「身体の動きがダイナミックに見えるか」がりましたが、今年はなくなりました。「身体の動き」のダイナミックさよりも、いかに細かいところまでキレイに施工できるかという「手先の動き」が重視されるようになりました。だから、例えばドアの外周や角、フチなど、細かいところまで丁寧に施工しているかどうかを特に気をつけて審査しました。細かいところは汚れやすい上、車をきちんと守るためには細かいところもきちんと施工しなければいけません。それから手数の少なさも大きなポイント。自分の車を施工してもらっているという気持ちでチェックしました。「この人だったら安心して任せられるな」と思える人はやっぱりうまいですね。

Q. 昨年のコンテストと比べて違いがありましたか?

昨年に比べ、技術はかなりレベルアップしています。平均点を見ても昨年より8~10点上がっています。出場選手も昨年の800名くらいから1,200名に増えました。昨年のコンテストでやさしい思いをして、今年リベンジするために出場したという選手もたくさんいて、1年間、相当一生懸命やったんだと分かるくらいの気合いを感じられました。

Q. うまい選手とそうでない選手の違いはどこにあると思いますか?

安定しているかどうかですね。コンテストで使われた車は、予選ではバラバラでしたが、地区は

ヴィッツ、全国チャンピオン決定戦準決勝はプリウス、決勝はアクアで統一されていましたが、うまい選手はどんな車を施工しても、スムーズでむだなく早く、マニュアル通りにきちんと施工できています。そして試合直前には「この車はルーフからピラーの流れがこうなっているからこんな感じで施工すればいいな」など、イメージトレーニングをしています。あとは審査員に「この部分はどんな風に施工すればスムーズか」と質問をしたりもしています。

反対にうまくない選手は、全体的な流れはできているんですけど、部分的に我流になっています。無駄な動きがでたり、作業がストップしたりして遅くなってしまふ。

うまい選手でもそうでない選手でも緊張はします。どれだけ上手な選手でも、スポンジを持つ手が震えていたりしますから。やはり現場で数をこなしている人は緊張しても、どんな車でも、落ち着いて施工ができるんだと思います。水谷選手が試合前に「眠くなってきちゃいました」と言っていたのにはすごいなと思いました。いっぱい施工することで自信につながり、それが安定になるんですね。

Q. 上位3選手の優れているところはどこですか?

水谷選手、細沼選手、大山選手を直接審査はしなかったのですが、技術的にどう優れていたかは言えませんが、とにかくみなさん早かった!自信に満ちて施工しているのが伝わってきました。大山選手は、僕が審査している選手の隣で施工されていたのですが、ガラスコーティングが終わってから、レジンに取り掛かって終わるまでがめちゃくちゃ早かったのにびっくりしました。おそらく3人とも、めちゃくちゃキーパーが本気で好きなんだと思いますよ。「好き」というのが根底になければ、上手にはなれないと自分の経験からも実感しています。

Q. どうしたら技術を向上させられるでしょう?

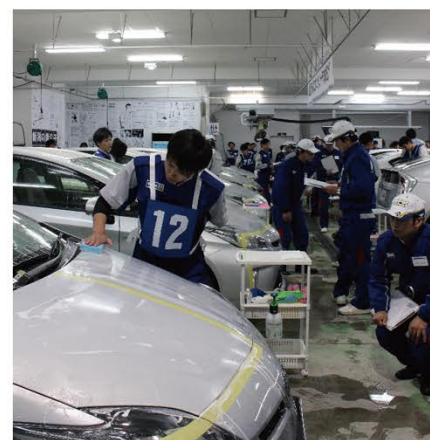
現場で一台一台、マニュアル通りに、きっちり施工することが大事です。お客様の顔を思い浮かべながら丁寧にキレイにしていく。当たり前ですけど、それが基本だと思います。

普段の施工をしっかりとすることで、リピートにつながり、リピートが増えれば、おのずと施工数が増え、技術も向上していくと思います。いろんな車種の施工をたくさん経験することで、コンテストの本番、どんな車でも落ち着いて施工することができると思います。

あとは気持ちを込めること。「自分の車をここまでキレイにしてくれているんだな」とお客様が感動してしまうほどひたすら真剣にやることだと思います。

Q. どうしたらチャンピオンが獲れますか?

技術って終わりが無いと思うんです。次から次へと上手な人が出てきます。昨年、チャンピオンの北本選手は僕が審査したんですが、「俺よりうまいじゃん!!」とびっくりしたし、「この人を超越する人は絶対いない!!」と思っていましたけど、今年チャンピオン決定戦に出場した40名の選手はみんな北本選手のレベルになっていました。水谷選手は、北本選手のチャンピオンビデオを見すぎて、北本選手のインタビューの言葉まで覚えてしまったくらいだったそうです。勝ち抜かれた選手の皆さんはみんな、チャンピオンビデオを観ていますね。うまい選手はどんな動きをしているのかを盗む。まずは真似をすることからチャンピオンへの道は開けると思います。そしてやはり毎日の施工が練習になるので、一台一台きっちりと施工することが大切だと思います。



SUPER GT REPORT 5月2・3日 第2戦[FUJI GT 500KM RACE]in富士スピードウェイ

ハンディウエイトに悩まされながらもポイントリーダーを守る!!

春の温かい日差しが降り注ぎ、富士の霊峰が天高く聳える静岡県小山町にスーパーGTマシンの吼声が轟き渡る。

37号車KeePer TOM'S RC Fは開幕戦優勝のため、本大会ではGT500クラスでは最も重い40kgのハンディキャップウエイトを搭載しなければならない。Q1はまずアンドレア・カルダレッリ選手がステアリングを握りコースインした。しかしながらQ1通過の8番手すら奪うこともできず、下位に沈んだままの14番手で予選は終えてしまった。Q1での敗退である。

14時15分、決勝。フォーメーションラップが開始される。スタートドライバーはアンドレア・カルダレッリ選手。500kmのレースである。とにかくミスなく走り切れば結果は付いてくる。ドライバーもさることながら、メカニックもミスは許されない状況でレースはスタートした。

まず2周目に1台を交わして13番手に浮上。その後も地味ではあるが順位をひとつずつ上げていく。7周目に12番手へ、9周目に11番手へ、そして10周目にポイント獲得圏内の10番手へと順位を上げた11周目、1コーナーにオイルが撒かれたということで、セーフティカーが入り、各マシンは先導された形での周回が続く。このセーフティカーが導入されている間は他のマシンを追い抜くことは禁止されている。15周目にレースは再スタートが切られると、16周目には9番手、その次の17周目には8番手までへと快調に順位を上げていく。しかし、レースはまだ序盤である。

33周目で7番手まで順位を上げた頃から各マシン共に第1回目のピットインが始まった。37号車KeePer TOM'S RC Fは38周目、満を持してピットイン。アン

ドレア・カルダレッリ選手から平川亮選手にドライブを交替し、タイヤを替え、給油を済ませる。ピットストップタイムは約50秒でコースに復帰。ミスのない作業である。メカニック達にも安堵の表情が浮かぶ。52周目に順位をひとつ上げて6番手となる。周回タイムはやはりウエイトが効いているのか伸びず、他のマシンと比較して決して遅くはないタイムを刻んでいる。

5番手とのタイム差がなかなか縮まっていけない。しかし、7番手のマシンとの差は徐々に開きつつある。ハンディキャップウエイトを搭載してのレースである。派手さは決していないが、淡々と走ることが今大会の使命。とにかく1点でも多くのポイントを獲得することである。

レース終盤へと入る76周終了時点で2回目のピットインを敢行。すべてミスなく行き、約43秒ほどでコースに復帰させる。完璧である。ドライバーは平川亮選手からアンドレア・カルダレッリ選手に交代。前マシンとの差が縮まらないのであれば、6位入賞を果たせばシリーズランキングトップは維持できる。ウエイトを積んでいないマシンと無理に戦い、トラブルやアクシデントに巻き込まれることなく走り切ることが何よりも大切であることを知っているカルダレッリ選手はGT300クラスのマシンを交わしながら、109周を走り切り6位でチェッカーを受けた。

KeePer TOM'S RC F37号車はシリーズポイントは25となり、2番手に5ポイントの差をつけたままランキングトップを維持した。しかし25ポイントということは第3戦のタイ大会では50kgのハンディキャップウエイトを搭載しなければならないことになる。暑いタイでどのように戦うか?鼓動が高まる。

